艱難は汝を玉にしない

佐藤　清助

一

「艱難汝を玉にす」私は、今までこの「格言」を何回となく耳にしてきた。辞書には「人間は、多くの辛いこと、困難なことを経験して立派な人物になることができる」と書いてある。

確かに、この格言の通りの辛いことや困難を自らの肥やしにして、「偉人伝」に見られるように光り輝く立派な人物に成長し、歴史に名を残した例はあることでしょう。だが、その無限倍の人々が、艱難に耐えられずに奈落の底に叩きつけられて来たのではなかろうか。

二

私が経営していた家庭教師派遣センターの家庭教師の中に、Aという年配の先生がおられた。大学生、大学院生教師のほとんどが、東大，医大、その他の超一流大学の所属である。この学生教師達は、教育や経済的環境にも恵まれ、受験勉強を進めるについて多少の凹凸、苦労があったにしても、ここで述べている「艱難」はほとんど受けずに受験の理想的な王道を歩み、栄冠をつかんだ人達である。この人達が、我が国や地方の指導者として、又はそれぞれの立場の重要な担い手となって行くことであろう。

A先生は、これらの学生教師とは全く異なった道を歩んできた。東北地方の鉱山町の坑夫の子として生まれた。A先生は、小学生の時に落盤事故で父を失い、働き過ぎの母を今度は結核で失ってしまった。一人ぼっちになったA先生は親戚に預けられ、しょんぼりとした思いで小学と中学を卒業した。現在と比較すると、当時の地方の一般の人々の教育環境は、極端に悪く、ましてA先生の環境からして、とても高校などに進めるものではなかった。

A先生の母は、生前、夫の事故死のこともあり我が子に対して口癖に言っていた。「危

ない仕事には就くな。食べて行ける仕事に就け」この言葉が脳裏に刻まれていたのか、A少年は、集団就職の「金の卵」の一つとして東京の料理店に就職した。

A少年の仕事は、金の卵として遇されることは微塵もなく、文字どおりの丁稚奉公であった。朝から晩まで、食器洗いと掃除、食材の洗いと皮むきに明け暮れた。冬には、手にアカギレが出来た。ようやく馴れて、料理の下ごしらえである。失敗し、その度ごとに先輩にどやしつけられた。そんな夜には、帰る当てのない故郷で亡くなった母や父のことが思い出され、枕が涙で濡れた。寝ることだけが最大の楽しみであった。このような生活が数年続いた。

あるとき、尊敬していた先輩の料理人がA少年に

「おい、お前はすごく頭がいいよ。調理師の資格を取ったらどうだ」

と言われた。A少年は調理師の資格を取ろうと決意した。

それから間もなく、最大の楽しみであった「寝る時間」をけずって、調理師資格取得の勉強を始めた。いざ、勉強をしてみると、栄養学や食文化の歴史など、どの分野の勉強も興味をそそられる内容であり、驚きすら感じた。

夢中で勉強し、一発の試験で合格し「調理師資格」を取得した。

A少年は、A青年になっていた。その後、A青年は勉強に磨きをかけ、調理師学校の先生になった。教材研究を完璧に行い、しっかりと大きな声で教えるA先生の授業は、絶大な好評を得た。しかし、実力教師とはいってみても学歴が義務教育の中卒だけでは、いかにも格好がつかない。調理師学校の生徒たちは、盛んにA先生の学歴を尋ねた。

「先生はナ、酒好きだから『飲兵衛大学酒学部の焼酎学科を酒席で卒業』した」

などと言い笑ってごまかしていた。が、その度に生徒たちに何か、後ろめたい気持ちになっていた。（高校ぐらいは出なくては）と考えるようになっていた。

とはいえ、夜間高校に通学しようにも、その時間がない。しかたがなく、独学で高校の勉強を始めた。仕事の合間を見て、まさに寸暇を惜しんで勉強の日々を重ねた。

ついに、「大学入学資格検定試験」に合格した。

A青年の頭上に光が射し、艱難が玉に転ずる兆しがみられた。A青年の「勉強力」に火が点き、燎原の火となって燃え盛ったのである。

それから数年後、何と、「東京大学文科三類」に合格をした。三十七歳の時である。

この素晴らしい快挙をテレビのワイドショーでも取り上げ放映され、新聞や週刊誌

の取材も受けた。テレビカメラが回る中で、ショーを掌るキャスターが盛んに質問をする。

「三十七歳での東大合格おめでとうございます。しかも、『金の卵』として集団就職された経歴をお持ちの方のようで、素晴らしい快挙ですね」

「……いや、そんな、快挙ではありませんよ」

「ええ！なぜ快挙ではないのですか」

Aさんが、事前の大まかな打ち合わせとは違った発言をするので、キャスターはあわててしまった。Aさんの日頃の思いが、小さな反骨心となって噴出したのだった。

「はい、東大合格者のほとんどが十八歳から二十歳前後です。若いうちに、すんなりと合格することが快挙なのです。彼らと私は二十年の差があります。その差というのは、受験生である私を取り巻いていた経済力と教育力という環境の差なのです。勉強をするには環境が大切です。私の育った東北の小・中学校には、私などよりも成績も良く能力のある子供がかなりいました。でも、その子供たちは高校にも進めませんでした。その子たちは、我が国の産業経済発展の部品となり油まみれになって働いているだけで、金の卵に値する吉報は聞いたことがありません。艱難は、人を幸せにするものではなく、文字通り、人に苦難を与え不幸にする言葉だと私は思っています。だから、『艱難汝を玉にす』などは、国民に艱難を与えた権力者やそれを好んで使う人の『まやかし』の言葉にすぎません」

「いやー厳しい言葉ですね。三十七歳の東大合格者、初な現役合格者とは違って、かなり芯が強いようです。皆さん、艱難を見事に克服した今後のAさんの活躍に期待しましょう」

最後まで、Aさんとキャスターとの間には、齟齬（そご）があったが、さすが名キャスター最後には、しっかりと美談仕立てにして場面を盛り上げて終わった。

それから四年後、彼は東京大学文学部を卒業した。しかし我が国には、いかに艱難に耐えたとはいえ四十を過ぎた中年男の新卒を、大きな懐で包み、理解をして採用してくれるような企業風土がなかった。彼の同期生は、国家公務員や商社、新聞社・テレビ局・出版社などの一流企業に次々に就職が決まった。彼だけが、ぽつんと取り残された。大学のゼミでは、年の功で、顔では平静を装うことができても心は泣いていた。

ゼミ仲間はAさんの就職が決まらないことを頻りに心配してくれた。しかし、Aさんは、（私でさえ東大に入れた。自分の潜在力に気が付かないで、そのまま埋もれてしまう人材がたくさんいるはずだ。その発掘の任に当たろうか）という思いを持つようになっていた。

（ええい、この際）、彼は埋もれた人材を発掘しようとして塾を始めることにした。塾ブームの風が吹き、A先生の情熱のこもった適切な指導と一流校への合格実績が結びつきたちまち、その地域の人気塾として発展していった。指導の先生も十数名雇うまでになった。

（やはり塾をやってよかった）彼は心からそう思った。だが、好事魔多し。

もともとA先生は健康で、かなり体力はある方だった。だが、連日の受験指導と塾経営のために体力を消耗し病魔に襲われた。ストレスから高血圧、高血圧からくる心筋梗塞であった。数年間に渡り入退院が繰り返された。その間に、生徒が一人去り、二人去り、まるで櫛の歯が欠けるように生徒の数が減り、雇っていた先生も去って行った。

ついに閉塾を決意した。

A先生が、私の家庭教師派遣センターに来られたのはそれからであった。とても真面目で、持参した大型カバンには数十冊の大学ノートが入っていた。そのノートには自分が指導する科目の中学受験、高校受験、大学受験の出題傾向を分類しその対策が、まるで芸術品と思えるほど美しい字でびっしりと書かれていた。しかし、面接時のちょっとした動作から、息切れが起こり、痩せた容貌も痛々しく、指導するだけの体力を持ち合わせているようには見えなかった。受験指導は指導教師の学力や情熱だけではなく、体力勝負の面がある。

それでも、A先生の家庭の主としての事情と指導に対する情熱に負けて、受験生の短期指導を担当させることにした。A先生は、それだけで少年のように顔を紅潮させて喜んだ。

A先生による一回目の指導後、受験生の保護者から感謝の電話を頂いた。

「A先生は本当に素晴らしい先生ですね。よく分るといって子供が喜んでいます」

私たちも大いに喜び、今後のA先生に期待し、別の受験生も担当させることにした。

ところが、それから数カ月後、中学受験生の生徒宅で最後の指導の帰途、A先生は

路上で倒れ、救急車で病院に運ばれてしまった。
退院後、年の瀬が慌ただしく流れる月の朝、A先生の人生にピリオドが打たれた。
平均寿命には遙かに及ばない六十年の全人生だった。
私は、小さな葬儀に参列し、棺で眠るA先生とお別れをした時、A先生の口から
「『艱難汝を玉にす』という格言は、国民に艱難を与えた権力者や好んで使う人のまやかしの言葉である」と発しているようでならなかった。

三

A先生と同じように、十五歳の少年少女たちは「金の卵」という巧言令色に操られ集団就職として、体いっぱいの不安と幼いなにがしかの希望を心に秘め故郷と親元を後にしたのだった。
地方の中卒者を、政財界もマスコミも金の卵ともてはやした。
当時、高度経済成長にさしかかっている我が国では、産業経済発展の歯車として働く「安価な労働力」が必要だった。だが、金の卵とは、口先だけの詐言に過ぎなかった。なぜなら、どこの職場も、一部を除けば、似たり寄ったりで「金の卵」として遇するところはなかった。むしろ、その言葉とは裏腹に、劣悪な労働環境下に晒されていた。
こんな劣悪な労働環境を隠蔽し、金の卵という詐言を弄して年端もいかない無知な子供を職場に連れてくるなどは、一種の「人攫い」か戦時中の労務動員的な「強制連行」類似行為と言ってもいい過ぎでないかもしれない。
耐えられず、ボストンバック一つを持って逃げ出す金の卵たちがいた。
物言わぬ、物を言う術を知らない金の卵たちは、使用者にとって低賃金で使い勝手がいいので、まさに金の卵であったことであろう。
戦前、農村は兵士の供給源であった。農村出身の兵士は、粗衣粗食と過酷な兵役にも耐えて使い勝手がよかったからである。これも金の卵と同種であろう。
艱難に耐え続けた彼、彼女たちがどれ程の「艱難汝を玉にす」の「玉」をつかんだことか。今、この金の卵たちは、れっきとした「後期高齢者」となり、またこれから迎えようとしている。
権力者の存在意義は、私たち民が人間として生まれてきた以上、「ああ、日本に生

まれてよかった」「日本に住んでよかった」「いい人生だった」と往生の間際までに、一瞬たりでも思える国家を創ることが最も大切なことではなかろうか。そのために、私達は努力をしてきたのであり、今も努力をしているのである。このような国家の土壌を造り、未来を描くことが、国家とその権力者の最低限の義務であり、これらを充足させ得る事こそ最終的な責務ではなかろうか。

若い人たちにおいてもグローバルな新自由主義、市場主義の影響を諸に受け、企業による「雇用調整」により、日本国憲法二十五条の「健康で文化的な最低限度の生活」の保障さえ危ぶまれている。底辺で喘ぐ社会的弱者及び一般の多くの人々とって、艱難に耐えたとしても、耐えた後の未来がどのように描かれて行くのか。未来が描かれていないから見えてこないのである。このようなことが人々の心を荒廃させる大きな一因なっているのではなかろうか。

私たち民は「貧しさに耐える」ことは出来る。それは、いくばくかでも「希望」という未来への光が射すことの裏づけが見えてくればの話である。このことを、チャールズ・チャップリンが、映画「ライムライト」との中で述べている。人間が生きて行けるのは

「希望と勇気と僅かなお金（サムマネー）」であると。

こんな風に考えて見ると「艱難汝を玉にす」という格言は、風雪に耐え貫き、人々に生きる指針を与える「金言」という印象を与えてはいる。だが、今も昔も民にとって艱難は絶えた事がなく、そのまま艱難に押し潰されてしまう場合がどんなに多いことか。現に、艱難に耐えられず自らの掛け替えのない「命」を絶つ社会的弱者が警察庁の統計によると、一九九八年から年間、三万人を超えており、多少の変動がっても十四年連続である。だが、これは氷山の一角と考えたほうがよい。なぜなら、遺書などがなく自殺と断定できない病死・老衰死などの自然死以外の「変死者」が十五万人もいるからである。この中に自殺者が相当数いるものと推察されている。これらの人々の犠牲の上に立っている社会的強者の人々は、目をつむらないでこの現実をしっかり見てもらいたいものである。

だからこの「格言」は、油断のならない御都合主義的な「疑念のある強者の言葉」という気がしてならない。

四

この疑念の謎を解くために、私は刑事コロンボになり、じわじわと捜査を開始した。

その結果、小さく「あっ、そうだったのか」と声を上げる事実にぶつかった。しかし状況証拠が多く、起訴をしても完全なる勝訴を得る事は難しいかもしれない段階ではあるが。

まず「艱難汝を玉にす」という格言の故事来歴を調べたところ、語感からして我が国の古代や中国の古典からと考えていたのは、私の不勉強による大きな誤りであることが判明した。意外や西洋の格言なのである。元をたどるとフランスの格言である。西洋の格言であるから当然なことではあるが、古い時代から使われたものではなく、我が国が幕末に開国し、以後、欧米諸国との本格的交流が行われた明治維新当時からなのである。

普通に翻訳すれば

「逆境は人を賢くする」（Adversity makes a man wise・）

になるものと思う。

なぜ、作為的とも思える翻訳をしたのであろうか。

それは、こんなことではなかろうか。

徳川政権の鎖国体制下で欧米諸国との交流がほとんどなかった我が国では、一八世紀後半から一九世紀後半の幕末にかけて我が国の記紀（古事記・日本書紀）や万葉集などの古代研究の学問である「国学」が急激に普及した。国学の隆盛から復活した「神道」つまり、神ながらの道によると、我が国は神国なのである。これらの影響から、我が国では、上も下も欧米外国人にたいしては、野蛮な「夷」として見る風潮があった。外国人を排撃する「攘夷運動」の論拠である。欧米諸国及び欧米人に対して、民の多くは大きな拒絶反応を抱えていた。それ故に、欧米流の言葉がそのまま受け入れられる下地は醸成されていなかった。

一方、欧米の実力を知り攘夷の不可能を悟っていた維新政府の上層部には、その実力を我が国の統治に利用する方が得策とする考えが支配的であった。

徳川政権を倒した明治維新政府の最大の課題は、これまでの武家政権から天皇中心の中央集権体制を確立し、欧米諸国と対等な関係に立つことであった。「富国強兵・殖産興業」「文明開化」を合言葉に、欧米の政治、産業経済や学問、文化などをど

んどん取り入れようとした。その一環として新政府は欧米より、いわゆる「御雇（おやとい）外国人」を高給で雇い入れた。一八七四年（明治七）～一八七五年にはその数が520名にも達した。そして、あらゆる側面からさまざまなことが導入された。

明治新政府のまさに急激な欧米流の近代化と近代化に持ちこむ政策は、多くの民の心を動揺させ不満を募らせた。その象徴的な政策が一八七三年（明治六）の徴兵令と地租改正であった。これらの政策全てが農民の負担において進められた。

当時の産業人口の約八割が農業である。徴兵令は、農家の若い働き手を三年間も国家が奪うものであり、地租改正は税制改革である。新政府にたいする民の期待に反し重税を課すものであった。新政府といっても徳川政権下の「農は納なり」の考えが生きているのである。

農民の不満が爆発し各地で農民一揆が頻発した。

このような民の動きを、新政府はことごとく武力で鎮圧した。

この時、動乱期の新政府の政策が少しでも、円滑に遂行できるように、西洋の「格言」がたくさん翻訳され政府は取り入れていった。まさに、その中で、我が国の国力を高め、民を統治するために都合のよい格言やことわざが取捨選択されていったことと思われる。

先ほどの「Adversity makes a man wise・」もその一つである。

政府はこれをただ「逆境は人を賢くする」といういかにも西洋からの翻訳っぽくしないで、民が受け入れやすいように、故事来歴をいかにも我が国の古代や中国の古典からのような装いをさせ

「艱難汝を玉にす」としたようである。

一八七二年（明治五）、新政府はフランスの教育制度を範とした「学制」を発布した。それによって小学、中学及び大学の学校ができた。民の負担が重く、不満が募り大暴動が起こる中、新政府は大慌てで学校教材の中に、民を統治するために有用と思われる格言をそれぞれ取り入れていった。新政府は太政官布告や文明開化の担い手となった草創期の新聞などを介して総力をあげて全国への啓蒙活動を行っていったものと思う。

明治維新の動乱期は民の不満をそらし、統治をしていくために単なる対症療法としか思えない「艱難汝を玉にす」という格言さえも必要だったのであろう。

明治政府によって制定され、戦後に廃止された「国定・修身教科書」は当時の体制

を維持し、民を一定方向に誘導するための教材であった。しばしば、体制に都合のよい「偉人伝」や「格言」が登場する。

二〇一四年の現政権「道徳教材」の取り入れも結局は同じ意図なのであろう。民が苦境に陥り息絶え絶えに喘ぎ始めると、突如として亡霊のように、この格言の意味が手を変え品を変えて現れてくるのである。

「贅沢(ぜいたく)は敵、欲しがりません、勝つまでは」

「痛みに耐えて改革を」

「将来の子孫に借金の負担をかけないための消費税の増税」

もう一度述べると、艱難に耐え、偉人伝に見られるような玉となれるのは例外中の例外である。

一般庶民である民にとって、「艱難」に陥ってもそれを生して「玉」となることは極めて困難でありそのまま押し潰(つぶ)されてしまうのが関の山である。政権が経済やその他の格差を作って、弱者に艱難を押し付け、しかもその艱難が「汝を玉にする」などは強者の倫理であり、格差社会を維持するための詐言か解消できないことによる方便に過ぎない。

私たちは、このような詐言や方便には騙されない。弱者に艱難を押し付け、強者だけに都合のよい社会は御免である。すべての人が「平和裏(へいわり)に、生きる意義を実感できる慈(いつく)しみのある社会」を作ることこそが大切ではなかろうか。

亡霊のように、この格言と格言の意味がたびたび出現し、民を翻弄(ほんろう)させるような時代が来ないことを祈るのみである。

プロフィール

作家名　佐藤　清助

生年月日　一九四一年　秋田県生まれ

経歴　私大法学部卒業

進学指導センター経営

著書　「社会授業の実況中継」一～四（語学春秋社）

受賞歴　二〇〇九年コスモス文学賞・児童小説最高賞

二〇一三年国民文化祭・現代詩入選

二〇一三年～一五年「あきたの文芸」現代詩入選・奨励賞

二〇一三年～一五年「文芸思潮」現代詩・エッセイ入選